

幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方

～昭和 51 年以降の幼小の連携を図る教育課程研究から～

神戸大学附属幼稚園 岸本佳子

(1) 幼小連携に関する教育課程研究の経過

① 昭和 51～53 年（幼小が研究開発学校の指定を受ける）

研究テーマ「幼稚園及び小学校において、幼児、児童の心身の発達に対応して、幼稚園及び小学校の連携を図る教育課程の開発研究」

ねらい： 幼児の発達にあった、幼稚園から小学校への円滑な移行を図るための方途として、幼稚園における総合活動が発展的に段階をおって、小学校の総合学習へと連携するように配慮する

主な内容： 幼稚園における総ての経験活動を検討して、教育内容と小学校との連携を図る必要のある教育内容とを、整理する

<資料1 幼稚園と小学校の教育の連携を図る教育課程>

② 平成 5～7 年（小中が研究開発学校の指定を受ける、幼稚園は協力園となる）

研究テーマ「学習主体としての子どもを支援する 12 ヶ年の教育課程の開発」

ねらい： 幼小では、連携をさらに進め、子どもの交流に取り組む。そして、お互いの教育環境を理解すると共にそこに学ぶ子ども達に注ぐまなざしを共有化し、温かさで一貫性を持った教育活動を行うことを目指す

③ 平成 12～14 年（幼小中が研究開発学校の指定を受ける）

研究テーマ「『社会を創造する知性・人間性』を育むことをめざした新しい教育システムの開発～子どもの学びから創造する 12 ヶ年のカリキュラム～」

ねらい： 学問体系から扱うべき内容があり、それらを配列するカリキュラムではなく、子どもの学びに着目し、子ども達が何を学んでいるのかを分析することからカリキュラムを編成していく。また、リフレクションという手法を取り入れることや校種を超えた交流を行うことで、教師の意識の変革と資質の向上を図る

主な内容： 3歳から 14 歳までの子どもの事実を書き綴り、その事実から学びを解釈し、その学びを分類し整理する。そして 3歳から 14 歳までの学びを並べて「学びの一覧表」を作成する。研究保育・授業の実践を振り返り、子どもの事実・学びを基にカリキュラムの修正及び学びの一覧表の修正を行う

<資料2 学びのカード>

<資料3 学びの一覧表 視点「健全なからだ」>

<資料4 学びをみとる視点の定義とその構造>

④ 平成 18 年～

研究テーマ「学びの連続性を保障し、教師が成長するシステムを備えた幼小接続期のカリキュラム開発」

ねらい： 5・6歳にふさわしいカリキュラムの構想及び教員の資質の向上

主な内容： 平成 12 年以降の 5・6 歳交流学习を継続する。「子どもの姿」と「学びの一覧表」を基にして、幼小の教師が共に、5・6 歳共通の指導計画を作成し、実践、評価する。

<資料5 学びの連続性を保障し教師が成長する連携システムを備え・・・>

<資料6 5・6歳の合同学習(指導計画例)>

⑤ 平成 22～24 年（幼が研究開発学校の指定を受ける）

研究テーマ「幼稚園教育と小学校教育の接続期における円滑な接続のための新分野創設にむけたカリキュラムと指導方法等の研究開発」

ねらい： 幼稚園と小学校の教育課程を接続するための新分野創設にむけた、接続カリキュラムと指導方法等の開発をめざす

主な内容：教育課程の連続性を明確にするための新たな分野の検討し、新分野を踏まえた「接続期」におけるカリキュラムを開発する

<資料7 研究の概要と新しい分野の予想図>

(2) まとめ

- 教員が交流し教育観や教育方法などの違いを知り、自己の教育観を変える
教育観の揺さぶり、子どもを見るまなざしの共有

- 幼小のカリキュラムをつなぐものさしを持つ

- 学びの連続を意識し、子ども達が展開している遊びの意味を問う

<資料8 遊びの意味を問い直す(4歳砂土水を使った遊び)>

- 5歳児の発達にふさわしいカリキュラムを考える

子どもが最終の目当てを意識し、それに向かって、友達と或いは全体でまたグループで、計画的に取り組む、まとまりのある活動。例えば、「10月の運動会」「12月のお店屋さんごっこ」「2月の生活発表会」など。

- 幼児期に育てるべき力とは、「物事に取り組む力」「人とかかわる力」

資料 1 幼稚園と小学校の教育の連携を図る教育課程

幼稚園における総ての経験活動を検討して、幼稚園独自の教育内容と小学校と連携を図る必要のある教育内容とを整理し分類した。

(1) 幼稚園の総合的な経験活動と基礎的な経験活動

① 総合的な経験活動

従来から幼稚園で行なってきた遊び、例えば、鬼ごっこ、砂遊び、ままごとなど、幼児が自ら楽しんで展開していくような遊びを指す。

② 基礎的な経験活動

その遊びをさらによく発展させるために、遊びによって幼児が知っていなければならないことや、技術的に処理していかなければならないようなものをいう。子ども達にとって、遊びは面白くて楽しいものでなければならぬ。遊びを面白く楽しく、そしてよりよく発展させるためには、それぞれの遊びに必要な要点を一つ一つを検討して、幼児の発達からみて、この期に是非身に付けさせたいと考えられるものを、経験活動の内容としてとりあげたのが、ここでいう基礎的な経験活動である。

これらの基礎的な経験活動を、その内容から次の二つに分けている。

幼稚園における 経験活動	→	① 総合的な遊びとして経験活動させること 自体に意義のあるもの (総合的な経験活動と称する)	
	→	② 総合的な遊びを展開させるために、スキル、ドリル的な扱いを必要とするもの (基礎的な経験活動と称する)	a. 経験の系列として扱うもの b. 内容の系統性、順序性等を 考えて扱うもの

a. 経験の系列として扱うもの

例えば、「じゃんけん鬼」で、じゃんけんのグーチョキパーや、勝ち負けの関係がわからない場合、遊びの途中で、このじゃんけんを特にとり出して、説明したり、繰り返してやらせてみたりして、よくわからせた上で、もとの遊びに戻していくようなものがそれである。これは、その時の遊びのその活動の必要に即して、スキル、ドリル、することで理解が可能なものと考えている。

b. 内容の系統性、順序性等を考慮して扱うもの

例えば、ゲーム遊びの「陣取り」で、陣を広げていく場合、三つまでしか数えられないのに、遊び方の上でいきなり六つまでの数処理が必要となつては、遊びにならない。この場合遊びを三つ、あるいは四つぐらいまでに数処理にとどめるか、適切な場において、四つ、五つと順序を追った数処理が可能ないようにさせておくことによって、はじめて六つまでを加えた陣取り遊びを面白く発展させることができる。

多くの経験活動の中には、このようにその順序性や系統性などを追っていかねば、理解しにくいものがある。これに類した経験活動は幼児の遊びの中に多様に含まれているのもかわらず、それが断片的、偶発的であったり、あるいは段階や順序が異なることから、保育者がことさら避けたり、あいまいに素通りさせたりして、せつかく育つ基盤や、意欲さえ、ないがしろにしてしまっているものがあるように思われる。これらを検討して子どもにとっては、自然な楽しい遊びとさせながら、保育者は、必要な経験活動を計画的に組み入れようとするものである。

(2) 基礎的な経験活動と総合科

小学校では、低学年期の望ましい教育として、幼稚園の総合的な遊びの形を受け、総合学習を導入することとした。従って幼稚園の基礎的な経験活動は、3歳児の個人的、社会的な生活習慣の形成を重点にするものから始まり、年齢が進むにつれて、順序性、系統性を必要とするものへと分化し、小学校の総合科へと連なっている。基礎的な経験活動のうち、言語に関するもの、数量形に関するもの、体育的活動に関するものなどについては、特に取り上げて検討し、3才から7才までを通して順序、段階、或いは系統などを整理している。

(「3才から7才までの教育課程」より)

資料2 学びのカード

クラス名	4歳 もも1組	活動名	おやつ後の休息时间
場所	保育室	日時	6月21日(水) 10時45分
子どもの名前	A男		
子どもの事実	<p>おやつを食べ終えた子どもが、個々に本棚から好きな絵本を取ってきて椅子に座って読んでいる。早く食べ終えたB男が「恐竜の図鑑」を取ってきて椅子に座り、「先に取ったも〜ん」と言って、読み始める。すると、C男が、B男の前に立ち、「あ〜ん、読みたい。貸して」とB男に何度も言う。B男は、C男の顔を見ずに恐竜の図鑑を読み続ける。C男は目に涙を溜めている。しばらくして、教師が「恐竜の本、先生のおうちから持ってきたのがあるから読む?」と言い、C男に別の恐竜の本を渡す。C男は「ありがとう」と言い、笑顔で受け取る。するとB男は椅子から立ち上がり、自分が読んでいた恐竜の図鑑を「あ、これ読む?」と言ってC男に差し出す。C男は「いらん」と言い、「Dくん。一緒に読もう」とそばにいたD男を誘い、テラスに出て一緒に読み始める。B男はそれをじっと見ている。そのとき、A男が教師のところに来て、「先生、ありがとう。Cくんは恐竜の本、貸してくれて…。Cくん、すごくうれしそうな顔したったね」と言う。教師は「そうだね。よかったね」と言う。A男は笑顔でうなづく。</p>		
事実の解釈	<p>A男は、牛乳を飲みながら、B男とC男のやりとりを見ていたのだろう。そして、C男が恐竜の図鑑を見せてもらえず困っている表情と、新しい恐竜の本をもらって喜んでいる笑顔の表情という表情の変化をとらえたのだろう。そして、C男が笑顔になったことを、自分のことのようにうれしいと感じ、教師に対して「ありがとう」と言ったのだろう。A男はC男とよく遊んでおり、好きなC男のことであるから、その行動や表情がよく見えたのだろう。友達の表情から、友達の気持ちの変化までをもとめることができている。</p>		
学び	<p>好きな友達の表情の変化から、友達の気持ちの変化を感じて、共感することができる <視点:人とのつながり></p>		
学びの要因	<p><対象 人の要素></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 表情の変化がわかり、表情から気持ちも理解することができるくらい、一緒に遊んでいて好きな友達 ○ 困っている友達を助ける教師 <p><環境の構成></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 椅子を丸く並べて互いの顔が見えるように座っているため、友達が言い合っている様子をよく見ることができた。 ○ 子ども達が言い合い、気持ちを伝え合うことのできるゆったりとした時間があった。 <p><教師の援助></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ A男は、C男に対する教師のかかわりをよく見ていた。教師はB男に対する指導として絵本をもう1冊出したが、A男にとっては、C男の思いを叶えてくれたという教師に対しての思いとなったようだ。B男、C男に対する援助が、A男にとっては、友達の気持ちを感じることができたというA男の学びを支えることとなった。 		

(「幼稚園研究紀要35」より)

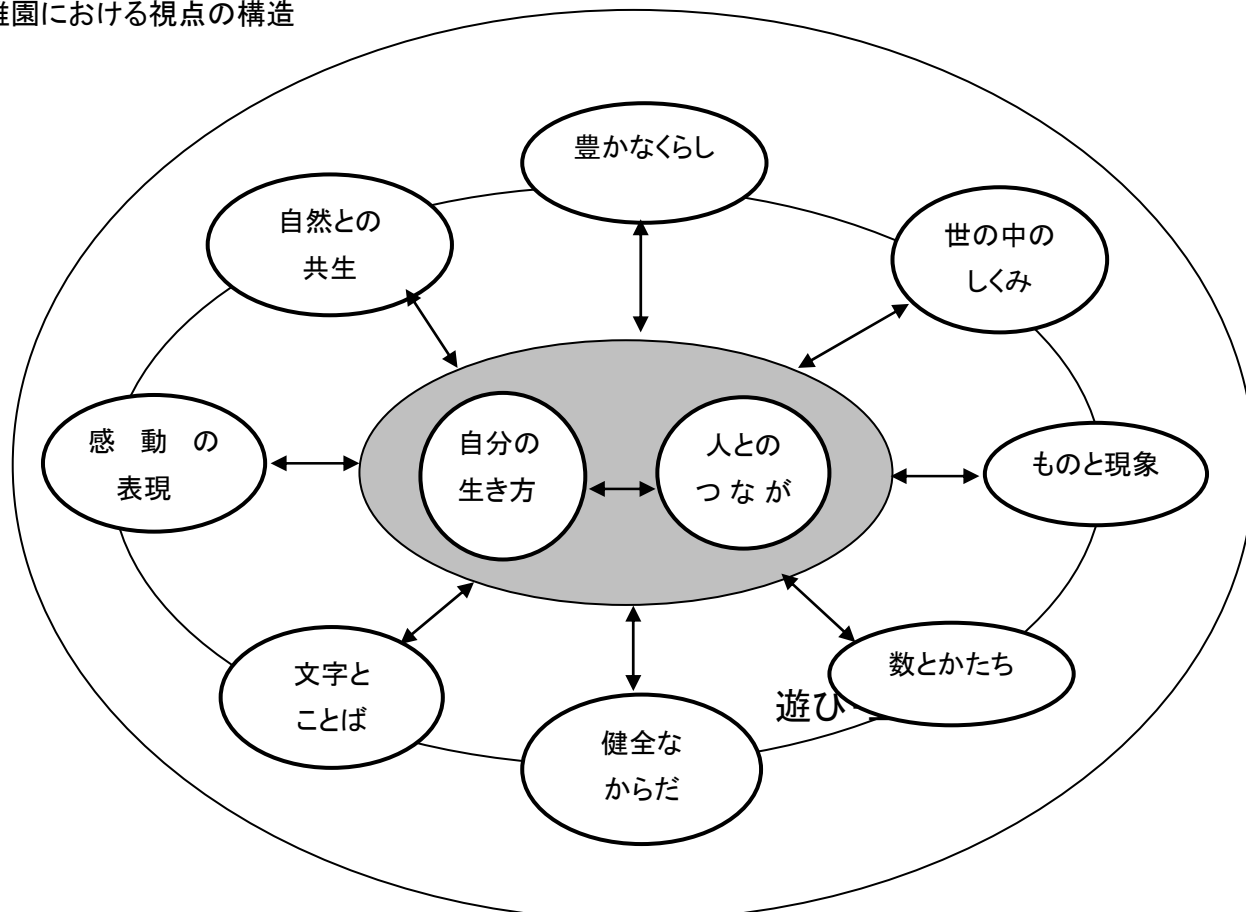
	「安全」 危険回避、災害予防	「運動」 遊び、ゲーム、競技、道具操作、ルール、目標	「健康」 成長、からだの仕組み、予防、手当て、増進	「精神的安定」 安心
3歳 (幼児)	日常生活の中で身を守る方法を知る	環境に合わせて楽しみながら身体を動かす	自分のからだの変化や状態がに關心をもつ	自分の居場所を見つけて安心感を得る
4歳 (幼児)	歩きながらはさみを使うとけがをしないようにする	ブランコやグロブジャンルの揺れる感覚は面白いと感じる	夏かぜで熱を出したり嘔吐したりすることを、友達の様子を見て気をつける	自分の居場所が分かることで、慣れない場所でも何とかならぬと安心して過ごすことができる
5歳 (幼児)	これまでの経験から原因をさぐり次に安全に活動するには、その原因を解消して遊ばないと考える	山の滑り台は、よくすべるので勢いをつけると上の方まで上がることができる	上靴のかかとを踏んでいると、気持ち悪い感覚であるということに気づく	自分の居場所が分かることで、慣れない場所でも何とかならぬと安心して過ごすことができる
6歳 (小1)	スポーツデーで、事故が起こることを未然に防ぐために注意しなければならないことがわかる	競技の内容や特性を知り、めあてを持って参加しようとする	摂取したものが体内で消化され、形を変えて排便されていることを知る	自分の健康状態を見つめ、友だちや教師に不調なことを聞いてもらうことで安心して生活する
7歳 (小2)	登校中の危険から身を守るための方法を知る	ボールを遠くに、そしてまっすぐに投げるためには、足を前に出し、腕を思いっきり振ることを知る	先生の、発育しているという声かけで、喜びを味わうことができる	鏡を見ながら、自分の歯並びにあった磨き方をすることが大切であることに気づく
8歳 (小3)	服を着たまま泳ぐことは難しく、水難事故にあった際に落ち着いて行動することの重要性を知る	目標とする25mを泳ぎ切ったことに満足する	体の部位の働きに関心を持ち、身体の内部にも注目して、いろいろな働きを見つけようとする	自分の朝の体調についていくつもの項目ごとに書き込んでいく
9歳 (小4)	災害時、素早く避難したり、人数確認したりするための行動を考え、避難訓練に際して、指示を聞き、迅速に行動する	インサイドキックをすると、ねらったところにパスしやすいことがわかる	ハンドボールのプレイ中、1対1になったとき相手のディフェンスを交わすためにはフェイントすればよいことに気づく	自分だけでなく友だちの健康状態にも關心を寄せる
10歳 (小5)	地震と火災の避難方法の共通点や相違点を知り、とっさの場合にでも落ち着いて行動できるような心構えをもつ	短距離走のタイムを縮めるために、目当てに向かってよりよい練習方法を考え、実践する	友だちの走り方を見て速く走るための方法を考えようとする	世間で話題になっているダイエットの方法の中には、健康を損なうものがあることに気づく
11歳 (小6)	不審者から自分の身を守る方法を考え、いざというときの備えを持つ	今年の自分の目当てを掲げて、その目当てに向かってどのくらいできるようになったかを常に授業後に振り返り、次回の見直しを立てられる	スポーツデーの種目において、低学年の子にわからないことや違っていることを教えるなど親切に関わり、みんなで一緒に取り組んでいこうとする	タバコやシンナーが体に及ぼす害がわかる
12歳 (中1)	レーザーポインタの光は目に当たると危険なので、取り扱いに気を付けなければならないと認識する	ゆっくりと大きなストロークをすることで、体力の消耗を最小限に抑えられることがわかる	ゲームに勝利するためには、チームメイトが互いに協力して練習した内容が生かされるようにすることが大切である	生活を変えようという意識と運動量の意味を理解して万歩計をつけて運動量を見直し、どのような運動をすればよいかわかった
13歳 (中2)	校外での班別行動は、単独行動よりも注意が分散することを防ぐ	それぞれの能力に合わせて技を選び、自分にあった技を練習した方が効率のよい練習方法であることがわかる	球技でチーム内で練習した技能をゲームで使うことができる	自分で食事を作ることを楽しさを覚えた
14歳 (中3)	安全に留意しインストラクターの指示に従って活動する	長く泳ぐためには、理にかなった泳ぎ方をマスターすることの重要性を理解し、そのための努力をする	チームで協力し、作戦通りにゲームができた勝利することで充実感が得られることがわかる	病気に関することは、病気の知識だけでなく患者と患者を取り巻く社会の問題があることに気づく

資料 4 学びをみとる視点の定義とその構造

10視点の定義

視点名	定義
自分の生き方	様々ななかかわり合いの中で、自分を見つめ、自己の在り様を探ることで、よりよい生き方を目指す
人とのつながり	人とかかわることを通して、(他者の)思いや考えに気づき、よりよい関係をつくりながら、共に生きる
健全なからだ	自他のからだの成長や変化に気づき、めあてをもって健康なからだづくりに取り組む
感動の表現	多様な表現や文化のよさを感じ、イメージをふくらませ自分らしく表現しながら豊かな感性を養う
自然との共生	豊かな自然体験を通して、その美しさや不思議さに触れる中で、自然や生物に対する理解を深め、望ましい自然観・生命感を身に付ける
文字とことば	日本語と英語の文字言語と音声言語を獲得し、思いや考えを正しく伝え合う
ものと現象	ものがもつ性質やものとの関係のなかで起こる現象に対して、科学的に分析・思考しながら法則・原理・定義を見いだす
数とかたち	数や図形を対象とした思考を通して、身の回りの事象を数理的に分析し、判断する力や態度を身に付ける
豊かなくらし	いろいろな素材の特徴をいかしたり、道具を活用したりして自分たちのくらしをよりよくするための方法について考えたり、実践したりする
世の中のしくみ	自分たちの生活を支えるものについて知り、それらと自分とのつながりをつくる

幼稚園における視点の構造



学びの連続性を保障し、教師が成長する連携システムを備えた 幼小接続期のカリキュラム開発

神戸大学附属幼稚園

幼小の教師が、共に「保育・学習」を作り出していく幼小連携

幼小の教師が共に、幼小どちらの子どもにも学びが得られる保育・学習を作り出していくことを目指す。

その結果、校種をまたいで子どもの学びの連続性が保障できる。そして、幼小接続期の子どもにとってふさわしいカリキュラムを作ることができる。さらに、幼小それぞれの教師の価値観がぶつかり合い、互いの価値観が揺さぶられ、学び合うことができる。

本校園の幼小連携

- ・子どもの様子や家庭の状況を伝える連絡会
- ・子ども同士の遊びを基にした日常的な交流
- ・保育、授業参観及び検討会
- ・幼稚園年長（5歳児）と小学校1年生（6歳児）、それぞれが行っている似通った実践を持ち寄る検討会
- ・5、6歳児が合同で同一内容の保育、学習をする「合同学習」

学びの連続性を保障し、幼小接続期の子どもにふさわしいカリキュラムができる

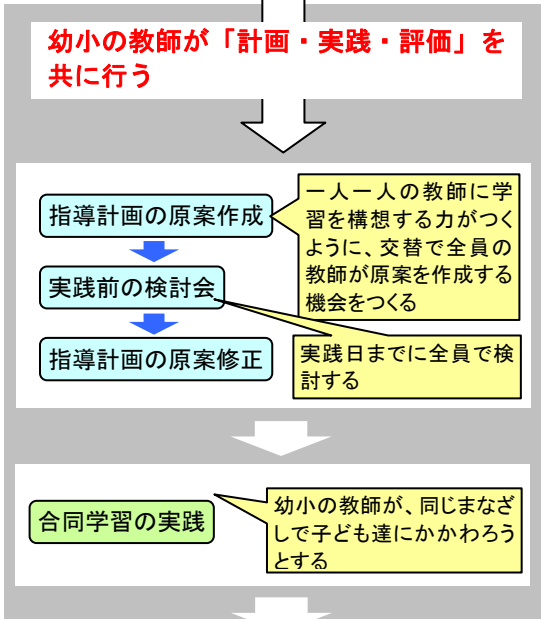
幼小の教師が共に「保育・学習」を作り出す

幼小の教師が互いに学び合い、成長する

学びの連続性を保障し、幼小接続期の子どもにふさわしいカリキュラムができる連携

「子どもの姿」と「学びの一覧表」を基に、5・6歳共通の指導計画を作成し、実践・評価する。

それにより、5歳にとっても6歳にとっても意味のある学習を作り出すことができる。また、実践・評価から捉えた子どもの学びが、さらに「学びの一覧表」を充実させることで、学びの連続性がより明らかになり、子どもにふさわしいカリキュラムができる。



幼小の教師が学び合い、成長する連携

幼小の教師が共に、計画、実践、評価を行う中で、「なぜ?」と思ったことを素直に出し合う。

それにより、幼小の教師の教育観や教育方法など、考えていることの違いがはっきりする。その違いを議論することで、互いの考え方を理解し合ったり、知恵を共有できたり、子どものみとりが深くなったりする。これが教師の学び合いであり、この学び合いが教師を成長させる。

学びの一覧表とは・・・

幼小中の全教師が「子どもの事実」「解釈」「学び」を「学びのカード」に、書き綴った。3歳から14歳までの子どもの学び約 6,000 枚をKJ法で分類し、10 の視点を見出した。これら、子どもの学びを年齢順に並べて発達・成長の過程を10の視点で示したものが「学びの一覧表」である。

「学びのカード」

子どもの事実	場面、状況、子どもの言動、表情などを具体的な事実
解釈	子どもの気持ち、具体的な状況がなぜ起こったのか、教師のかかわり方を含めた教師自身の考えや思い
学び	子どもがどのようなことを経験したのか、どのようなことを学んだのか

「学びの一覧表」の視点

- 自分の生き方
- 人とのつながり
- 健全なからだ
- 感動の表現
- 自然との共生
- 文字とことば
- ものと現象
- 数とかたち
- 豊かなくらし
- 世の中のしくみ

【問い合わせ先】

神戸大学附属幼稚園
〒673-0878 明石市山下町 3-4
TEL (078)911-8288 FAX (078)914-8153
E-mail hudev-akashikg@edu.kobe-u.ac.jp

資料6 5. 6歳合同単元学習「いっしょにどろだんごをつくろう」(6月8日公開研究会指導計画)

公開場所: 幼稚園・園庭、小学校・前庭・総合遊具 10:00~11:30 実践者: 西山、松尾(幼稚園) 高橋、長谷川(小学校)

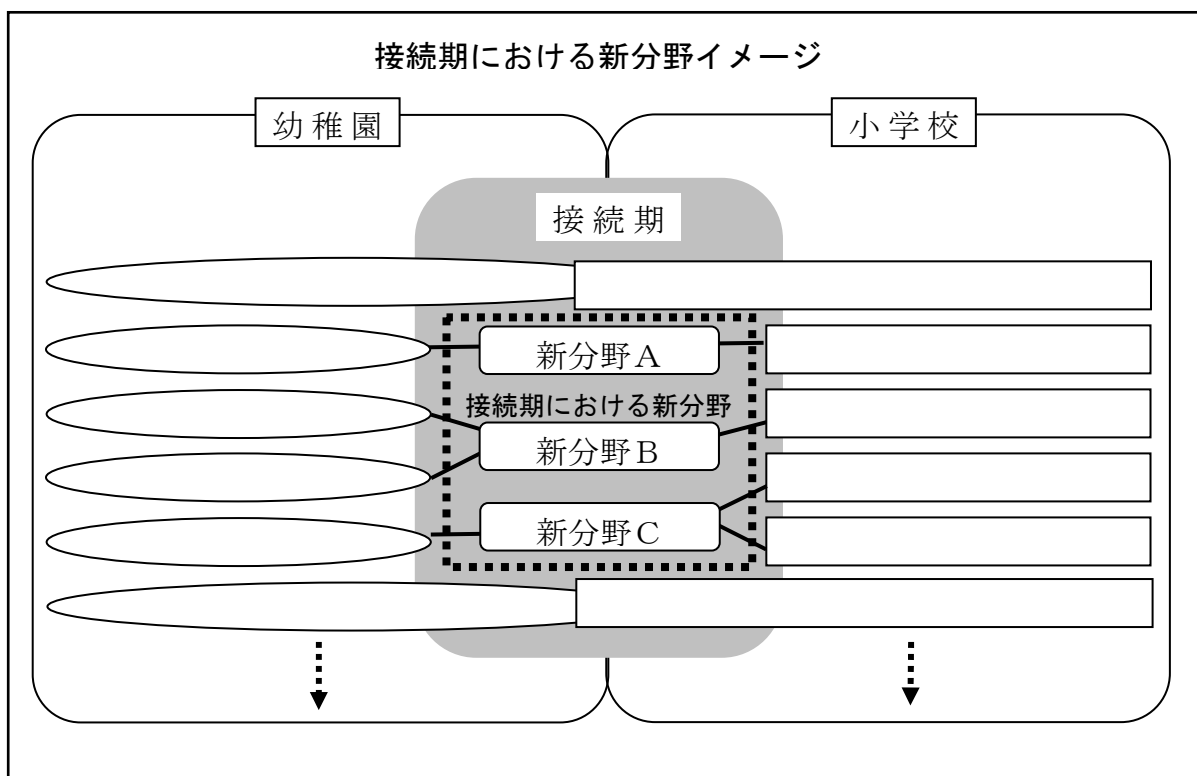
本時の目標	<ul style="list-style-type: none"> ○ つくりたいどろだんごのイメージをはっきりともつ。(自分の生き方: 自ら決める、選ぶ) ○ これまでの経験から、原因と結果について考えながら使う砂の種類や表面をなめらかにする手の使い方やこする場所を工夫する。(ものと現象: 現象) ○ 友だちや先生につくったどろだんごを見せたり、どろだんごの作り方やいい砂のありかを教えたり、わからないことをたずねたりする。(人とのつながり: 自分のことを伝える) ○ 友だちのつくっただんごをすごいと思ったり、作り方をまねしたいと思ったりしてそのよさを感じる。(人とのつながり: 他者を賞賛する) ○ イメージしたどろだんごをつくり上げていくおもしろさや自分が考えたどろだんごが出来上がっていくことに喜びを感じる。(自分の生き方: 自分に満足する) 			
時間	学習活動	期待する子どもの様相(ねらい)	◇形態 *環境の構成 ○教師の援助	子どもの事実
10:00	1) 幼稚園・園庭のポプラの木の下に集まる。 2) どろだんごづくりについて話し合う。 ・自分のつくりたいどろだんごについて話す ・友だちの話を聞く ・水道のある場所や、行ってもよい場所を聞く ・時間の目安や合図を知る	<ul style="list-style-type: none"> ・ 同じどろだんごづくりをする仲間がたくさんいることを喜ぶ。(人とのつながり: 他者という喜びを感じる) ・ 同じところに集まった友だちのどろだんごをみたり、話を聞いたりして、つくりたいどろだんごのイメージをはっきりともつ。(自分の生き方: 自ら決める、選ぶ) 	<ul style="list-style-type: none"> *教師がどこにいるのかがよく分かるように、赤色の服を着用しておく。 *日差しがあたらず、6歳児80人、5歳児58人が落ち着いて話ができて、すぐに活動に移れるポプラの木の下に集合する場を設定する。 ○仲間と再び出会えたことをうれしいと思えるように、教師も子どもと一緒に「いっしょに」「こんにちは」と挨拶をする。 *友だちのどろだんごを見て刺激を受けたり、わからないことを教えてくれる友だちがわかったり、つくれる場所がわかったりしてつくりたいどろだんごに向かって取り組めるように、つくりたいどろだんご別に集まる。 ○つくりたいどろだんごのイメージに向かって活動できるように、同じどろだんごをつくりたい友だちのどろだんごを見たり、話を聞いたりできる時間をもつ。 *屋外でも全員に声が聞こえるように、ポータブルのマイクを用意する。 ○活動範囲をいくつかのエリアに分割し、担当を決めて主にそのエリアの子どもの支援にあたることで、全ての子どもの様子を必ず教師の誰かは見ることができるようになる。そして、実際の様子によって連絡を取り合い、エリアや人数の配分を変えて支援に当たる。 小学校前庭・総合遊具(松尾) 幼稚園園庭(西山・長谷川) 全体(高橋) ○水道は、いつでも誰でも自由に使えるように、場所がわかっていなかったり使っていないのか躊躇している子どもには、ありかを知らせたり使っていることを知らせたりする。 *水道が混雑しないように、たらいに水を張って用意しておく。 	
10:10	3) どろだんごづくりをする。 ・場所を決める ・どろをつくる ・どろだんごをつくる ・つくったどろだんごを見せたり、話したりする ・わからないことを聞く	<ul style="list-style-type: none"> ・ これまでの経験に基づき、原因と結果について考えながら、使う砂の種類や表面をなめらかにする手の使い方やこする場所を工夫する。(ものと現象: 現象) 	<ul style="list-style-type: none"> ○つくりたいものが同じ友だちは誰なのか、その友だちがどこに行くのかわかりやすいように集まったグループごとに時間をあけて活動に移るようにする。 ○結果をみて原因を考えているときにはじっくりと見守ったり、一緒に考えたりして次の工夫を考えられるようにする。 ○やり方を変えるなどの工夫をしている子どもには、なぜそうするのか問いかけることで、原因と結果を考えられるようにする。 	

資料 7 研究の概要と接続期の新しい分野の予想図

研究概要(平成22年度～平成24年度)

研 究 内 容
<p>○研究開発課題 幼稚園教育と小学校教育の接続期における円滑な接続のための新分野創設にむけたカリキュラムと指導方法等の研究開発</p> <p>○研究の概要</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 子どもの発達段階を踏まえ、幼稚園と小学校に「接続期」を設定し、教育課程の連続性を明確にするための新たな分野の検討 ② 新分野を踏まえた「接続期」におけるカリキュラム開発 ③ 新分野を踏まえた指導方法及び教材の研究開発 ④ 研究実践による実践データの収集 ⑤ 研究開発結果に対する検証・評価 ⑥ 幼稚園から小学校を通した、子どもの追跡調査の実施と検証

接続期の新しい分野の予想図



資料8 遊びの意味を問い直す

砂・土・水を使った遊び（3年保育4歳児）

ねらい（視点別）4月～5月中旬

担任 赤井祥子

自分の生き方	人とのつながり	健全なからだ				感動の表現	自然との共生	文字とことば	ものと現象	数とたち	豊かなくらし			世の中 <small>の</small> しくみ
		安全	運動	健康	精神的安定						くらし	個人の生活習慣	集団生活のルールや流れ	
①深く掘ろう、山を大きくしようなどしたいことを意識して取り組む ②思い通りのものができて嬉しく思う	③友達と同じものを作ったり、一緒に大きな山を作ったりすることを楽しむ ④作ったごちそうを友達や教師に食べてもらう嬉しさを味わう ⑤使いたい道具を借りようと友達に自分なりに言葉で気持ち伝えようとする			⑥汚れた手や足を洗ってきれいにするようにしようとする			⑦花びらや木の枝、さくらの実を使ってごちそうを作ることを楽しむ		⑧水と砂や土の混ぜ具合を様々に試して、硬さや柔らかさ、かたまり具合が違うことを感じる ⑨裸足で砂を踏んだり、砂場に足を埋めたり、水溜りに入ったり、泥団子を作ったりすることで、砂や土、泥のいろいろな感触を楽しむ ⑩水が砂にしみ込んだり、たまったりすることを不思議に思ったり、楽しんだりする				⑪使いたい道具を友達と分け合ったり交代したりして使う ⑫足を拭くために使った雑巾を洗ってきれいにするようにしようとする	

予想される子どもの活動と子どもにとっての遊びの意味

() 内の番号がねらいと対応

4月上旬	中旬	下旬	5月上旬	中旬	
<p>予想される子どもの活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大スコップやレーキを使って山を作る ・砂をお皿やカップに盛ったり積んだりしてごちそうを作る ・作ったごちそうや山に拾った花びらを飾る <p>子どもにとっての遊びの意味</p> <ul style="list-style-type: none"> ○大きな山を作りたいと思って作る (①) ○友達と同じものを作ることが楽しい (③) ○思い通りのものができて嬉しい (②) ○花びらを飾りに使ってごちそうを作ることが楽しい (⑦) 		<p>予想される子どもの活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・数人の友達と一緒に山を作る ・大スコップで穴を掘る ・カップに砂を押し入れて型抜きする ・砂に水を混ぜて団子を作る ・掘った穴に水を流し入れる ・花びらや木の枝を使ってごちそうを作る ・友達と道具を交代で使ったり分け合ったりする ・作ったごちそうを友達や教師に食べてもらう <p>子どもにとっての遊びの意味</p> <ul style="list-style-type: none"> ○友達と一緒に一つの山を作ることが楽しい (③) ○もっと大きくしよう、深くしようと思って作る (①) ○思い通りのものができて嬉しい (②) ○砂や土に水を混ぜると固まりやすくなったり、硬くなったり、柔らかくなったりすることに気付く (⑧) ○水と砂や水の混ぜ具合を様々に試して、硬さや柔らかさ、かたまり具合が違うことを感じる (⑧) ○砂のザラザラした感触やドロドロした感触が楽しい (⑨) ○水が砂にしみ込んでいくことを不思議に思う (⑩) ○掘った穴に水がたまるのが楽しい (⑩) ○拾った花びらや木の枝を具や飾りに使ってごちそうを作ることが楽しい (⑦) ○水と砂や土を混ぜるとドロドロになるのが楽しい (⑧) ○貸してほしい気持ちを友達に伝えようとする (⑤) ○友達と道具を交代で使ったり分け合ったりして使う (⑪) ○友達や教師に作ったごちそうを食べてもらうことが嬉しい (④) 		<p>予想される子どもの活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・裸足になって、砂を踏んだり、足を砂に埋めたり、水溜りに足を入れたりする ・泥団子を作る ・さくらの実を集めて、料理に使う ・足を洗って拭く ・使った雑巾を洗って干す <p>子どもにとっての遊びの意味</p> <ul style="list-style-type: none"> ○砂や土の温かさやザラザラした感触、ドロドロした感触が楽しい (⑨) ○水と土を混ぜて固まったり柔らかくなったりすることを感じる (⑧) ○さくらの実を混ぜたり飾ったりしてごちそうを作ることが楽しい (⑦) ○汚れた手や足をきれいにするようにしようとする (⑥) ○使った雑巾を洗ってきれいにするようにしようとする (⑫) 	